

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷九十二第

行發日一月一十年四和昭

## 論 叢

營業税に於ける累進課税 . . . . . 法學博士 神戶 正雄

平均生産力説について . . . . . 文學博士 高田 保馬

我國に於ける生命保險業の首唱と先驅 . . . . . 文學博士 三浦 周行

經濟靜學と經濟動學 . . . . . 文學博士 米田庄太郎

## 說 苑

北米合衆國の農業問題 . . . . . 經濟學士 八木芳之助

景氣變動と日本資本主義の成立 . . . . . 經濟學士 谷口 吉彦

明治政府の貸附金 . . . . . 經濟學士 吉川 秀造

## 雜 錄

漁業についての一管見 . . . . . 法學博士 財部 靜治

徳川時代の商人カルテル . . . . . 經濟學士 菅野和太郎

獨逸信用組合の近狀 . . . . . 經濟學士 楠見 一正

禁漁制度に就て . . . . . 經濟學士 岡本 清造

新地租法案の税率 . . . . . 經濟學博士 汐見 三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

## 獨逸信用組合の近狀

楠 見 一 正

(一)

十九世紀の中葉歐洲大陸を襲つた經濟的大不況は一方庶民階級を飢餓に瀕するの慘狀に陥れたが、又他方に於て之等窮民の救済の爲めに共濟的組合運動を勃興せしむるに至つた。此の時に當り獨逸の産業組合は偉大なる二人の手に依つて創設せられたのである。而も此の二人は各其活動の方向を異にしたが爲めに、獨逸の産業組合も亦二つの系統に依つて育まれて來た。即ち一は一八四九年に初めて創設せられたライプアイゼン氏の農業者を主とするものであり、他は一八五〇年の創始にかゝるシユルツェ・デーリッツェ氏の都市商工業者及勞働者を中心とする信用組合之である。かくして兩者は毅然たる旗幟の下に漸次發達したが、之と

雜 錄 獨逸信用組合の近狀

共に資金需給の圓滑には大なる不便を感ずるに至つたので、ライプアイゼン氏は多年の熱心なる研究の結果、一八七二年「ライン農業的産業組合銀行」(Rheinisch-landwirtschaftliche Genossenschaftsbank)の名の下に、一の産業組合中央機關を創立するに至つた。彼は之に依つて組合の金融、検査及所屬組合の結合關係を圓滑ならしめんと欲したのである。其後一八七四年に「*Disconto- und Kassenbank*」とに夫々中央機關の創立を見たが、尙此の三銀行では其の金融に於て不十分なるを免れ得なかつたから、更に又一八七四年「獨逸農業中央銀行」(Deutsche landwirtschaftliche Generalbank)が創立せらるゝに至つた。<sup>2)</sup>之等中央機關の發達と共に、又他面に於て産業組合に法律上の根據が與へられた。獨逸の産業組合に法制上の統制を加へた最初のもは、一八六七年のプロシア國法である。後一八八九年獨逸帝國の産業組合法律となり、翌年より實施せられたが、其後最近では一九二二年、一九二三年、一九二六年の改正が加へられてゐる。かくして獨逸の産業組

第二十九卷 七六三 第五號 一三九

1) Henry W. Wolff, Peoples Bank, 4th Edition London 1919. p. 70. p.

2) Prof. Dr. Ernst Grünfeld, Das Genossenschaftswesen, 1928. S. 239-240.

合は著しき發達を見つゝあつたが、彼の歐洲大戰争は凡ての獨逸經濟力を破壊し、産業組合も之と運命を共にせざるを得なかつた。然し戦後通貨の安定と經濟活動力の復舊は獨逸産業組合の活動を復活せしめ、着實なる發達を示しつゝある。最近 Blätter für Genossenschaftswesen 誌は獨逸産業組合銀行、Genossenschaftsbanken の營業報告を發表してゐる。今之に依つて以下少しく其の近狀を窺つて見たいと思ふ。

(二)

元來産業組合の信用機關に於ては信用需要に對する自助的觀念が營利的動因よりも遙かに強く、信用能力ある共同團體に於ける受信力を把握せんとするものである。シュルツエ氏の信用組合は國家の補助に頼らずして全く組合員相互の力のみによつて自立せんとするに反して、ライファイゼン氏の信用組合は間接に國

家の資本を要求せんとするのである。産業組合銀行 Genossenschaftsbank とは廣義に於ては短期信用に對する信用組合、Kreditgenossenschaften、及貸附組合、Darlehenskassenvereine、並に長期信用に對する地主金融組合、Landschaften、及家主組合、Hausbesitzer-Genossenschaften の四つを包含するものである。即ち庶民銀行、Volksbank の意にして、狹義に於ては産業組合銀行は信用組合、Kreditverein, creditassociation のみを指すものゝ如くである。(此の論文中義の信用組合を指すもの様であるが、今假りに暫らく産業組合銀行の名に従つて置きたいと思ふ。)

産業組合銀行の營業報告は隔月に發表せらるゝものであるが、一九二九年四月末に發表せられた營業報告に依れば本年二月末の精算と四月末の概算とが明かにせられてゐる。今その營業報告を示せば第一表の通りである。

第一表 産業組合銀行營業成績表(單位千ライヒスマルク)

3) Blätter für Genossenschaftswesen, Berlin, den 2. August 1929; Zwei-monatsbilanzerggebnisse der Genossenschaftsbanken Ende April 1929; 因みに此雜誌は初め Schulze-Delitzsch 氏の創始に係り連綿今日に及べるものである。

4) Friedrich Leitner, Bankbetrieb und Bankgeschäfte, 1923, S. 111.



組合員出資額  
積立金

産業組合中央信用機關(ドレスデン銀行  
ブロシア金庫及中央金庫)に對する債務

其他の銀行に於ける債務

貯蓄預金、預金及借入金

内 要求拂

内 三ヶ月以内の期限のもの

内 三ヶ月以上の期限のもの

小切手及當座勘定債務

其他債權者勘定(手形引受借入特別財産  
等)

其他の債務(抵當債務及収益を含む)

計

C 以上兩者に含まるるもの

手形保證及保證債務

手形裏書上の債務

證券定期取引上の債務

一五、七六	一八、六八	一〇、九七	一〇、二七	二六、五五
六、八二	七、三九	六、六七	七、五〇	七、一八
五、八八	五、九四	四、六七	五、七〇	四、九六
六、七二	八、四四	九、六七	七、七〇	七、一八
二、四五	一、七〇	一、九〇	一、六五	一、六五
三、五七	四、九五	四、七三	五、九七	四、八〇
二、八七	三、〇五	三、九四	三、〇〇	三、三三
三、二五	三、七五	三、五三	三、三三	三、七〇
七、六六	一、三三	一、九三	一、〇三	一、〇三
三、二六	九、九二	四、二〇	八、九三	六、八八
二、九七	一、六三	一、七五	一、六六	一、五五
三、四八	三、九三	三、九八	三、三三	三、七七
一、八八	一、九八	一、五〇	一、四三	一、八三
六、〇〇	六、六六	五、三三	五、七六	四、七五

之に依つて見れば本年二月末の調査概算に於ては報告産業組合銀行數は一〇六であつたに對し、四月末の報告銀行數は一〇八となつてゐる。二月末の精算に於ては一三一四の産業組合銀行が調査表に現はれて

ゐる。之は概算に報告しなかつた小産業組合銀行が、二ヶ月後の精算に於て報告せられたからである。都市産業組合銀行は其三四月に於ける概況に依れば、敏感なる金融市場及通貨關係を明かに反映してゐ

る。尤も多少之と其の標準を異にするが、同様の發展は信用銀行、Kreditbankenの營業報告の中にも見出される、而してそは外面上總經營資本、Gesamtbetriebsmittelの増加となつて示されてゐる。總經營資本は前の一二月に於ては六〇・六百萬 R.M.の増加を示したが、四月末には六五・七百萬 R.M.の増加を示して、一・五九五百萬マルクに達した。かく大増加を示した原因の主なるものは貯蓄預金の増加である。又當座預金債務出資額及積立金の増加も見逃す事が出来ない。

報告月に於ける總經營資本の増加に就いては、年初二ヶ月の發展に於けると同様に、貸借對照表上の債務(Bilanzmäßigen Verbindlichkeiten)が干與する所大であると共に、又手形裏書上の債務(Giroverbindlichkeiten)も亦同様に増加を示してゐる。此の貸借對照表上の債務並に手形裏書上の債務の増加は伸張した經濟狀態の反映に外ならぬ。手形裏書上の債務は三―四月に於て一三四・一百万 R.M.から一四八・二百万 R.M.に増加したにも拘らず、貸借對照表上の債務は僅かに八・九

百萬 R.M.だけ増加して七四・四百萬 R.M.になつたに過ぎなかつた。尤も手形裏書上の債務年は初二ヶ月に於ては反對の傾向を示してゐるが、此の減少は流通手形の債務が減少した結果である。次に手形保證及保證債務(Avale und Bürgschaftsverpflichtungen)は兩報告月に於て三・二百萬 R.M.の増加を示して約三・六百萬 R.M.に達したが、之に反して證券定期取引上の債務(Pflichtungen aus Effekten-Termingeschäften)は約八十二萬 R.M.だけ減少して三・九百萬 R.M.となつた。

今産業組合銀行の總資産を一銀行平均にして示せば第二表の示す通りである。

第二表 一産業組合銀行平均概説(單位千ライヒスマルク)

月 末	出資金及受託外來貸出運用積立金	資金	貸金	總資産
一九一三年十二月	一九〇,二	一,〇八二,四	一,〇五三,〇	一,二四二,二
一九二四年十二月	二〇三,三	一,〇八二,九	一,〇五三,〇	一,二四二,二
一九二五年十二月	二一六,三	四九三,三	四九三,一	五五五,八
一九二六年十二月	二四一,一	五九三,三	六四三,三	八二二,八
一九二七年十二月	二七四,四	七三三,二	八四三,九	一,〇五〇,〇
一九二八年六月	二八〇,〇	八四三,三	九〇三,五	一,一三二,一

一九二八年八月	一八六、一	六三、八	六四、五	一、六六、四
一九二八年十月	一九一、五	六九、一	一〇〇、三	一、三三、九
一九二八年十二月	一九七、三	七五、五	一〇一、七	一、二九、〇
一九二九年二月	一〇五、一	一〇〇、八	一〇〇、三	一、三〇、六
一九二九年四月	三六、三	一、〇五、〇	一、六八、七	一、四三、八

概算數字を基礎とせるものにして他は凡て精算による

一九二九年二月末には總資産は一産業組合平均で約百三十萬六千 R.M.であつたが、四月末には百四十萬 R.M.に達してゐる。之を戦前一九二三年末の百四十六萬 R.M.に比して大なる差異は認められない。假令此の四月の概算數が後から報告せられる最も小さな産業組合銀行の追加に依つて其平均數の減小を見るところも、全體の傾向として戦前の状態に著しく接近して來た事を認め得るであらう。

(三)

受働的業務は自己資本と外來資本とに大別せられる。自己資本は約一〇・五百萬 R.M.の増加を示して二

五〇・七百萬 R.M.に達した。前二ヶ月の著しい増加は年々行はれる夥しい積立金繰入に導かれたものであつて、正に六・六百萬 R.M.の増加を示した積立金は、今報告月に於ては僅かに三・六百萬 R.M.の増加に過ぎなかつた。之に反して組合員の出資額 : *Geschäftsguthaben der Mitglieder* は六・九百萬 R.M.の増加を示して一七六・五百萬 R.M.に達したが、其の増加は前二ヶ月に比して幾分多い様である。自己資本の一産業組合銀行平均額も前二ヶ月よりは二萬二千 R.M.の増加を示して二十二萬六千 R.M.となり、著しく戦前の状態に接近して來た。更に總資産に對する自己資本の割合は本年二月末には一五・七%であつたが、四月末に於ても同様に一五・七%を示して何等變動は見られなかつた。之を前年の年初二ヶ月は其次の二ヶ月よりも此の割合が多かつたに比して、本年は反對の現象を示してゐるといふべきであらう。即ち減少が停止したといふ事それ自體が既に進歩を意味してゐるが、若しも減少

の停止が更に持續するならば、必ずや次の月に於ける増加となつて現はれるであらうからである。

次に外來資本に就いて見るに、預金の増加は次第に緩和せられて來た。前二ヶ月に於ては預金の増加は八一・九百萬マルクに達したに對して、本期に於ては預金の増加は僅かに三九・二百萬マルクに達したに過ぎなかつた。而して其の額は一二二四・三百萬マルクに達してゐる。貯蓄預金の内期限付預金は三〇・六百萬マルクだけ増加して著しい現象を示し、其の額は七四二百萬マルクに達した。之に反して短期預金の増加は僅かに五・三百萬マルクにして、要求拂貯蓄預金は約一六・六百萬マルクに達したのである。かくの如く總預金現在高中に解約期限付の預金が著しく加はつてゐる事は、次の第三表に於ける貯蓄預金及當座勘定債務の平均的增加に依つても明かに知り得るであらう。

第三表 受託外來資本平均額 (單位千ライヒスマルク)

月 末	貯蓄預金		顧客の當座 勘定殘額
	要求拂預金 預金	解約期限付	
一九一三年十二月	一五、二	七〇、七	一三、四
一九一四年十二月	一六、五	七〇、七	一四、七
一九一五年十二月	一六、八	一七、五	一五、〇
一九一六年十二月	一四、七	三七、〇	一四、六
一九一七年十二月	一〇、三	四二、五	一五、四
一九一八年六月	一四、三	四三、四	一五、八
一九一八年八月	一四、〇	四六、五	一五、七
一九一八年十月	一五、一	四九、三	一六、七
一九一八年十二月	一三、〇	五〇、八	一七、八
一九一九年二月	一三、七	五九、八	一八、五
一九一九年四月	一四、八	六九、五	一八、七

四月の數字は概算數を基礎として算出したものである

産業組合中央信用機關に對する債權 : *Cuthaben bei den Genossenschaftliche Zentralkreditinstituten* と其他の銀行に對する債權が同様に増加した事は、他面に於て債務の増加を意味してゐる、即ち前二ヶ月に於ては其他の銀行に對する債務は六・七百萬マルクの増加を示



して、産業組合中央信用機關の債務の増加が二・五百萬マルクであつたに比して著しい増加を示してゐるけれども、本報告月に於ては産業組合中央信用機關に對する債務は六・六百萬マルクだけ増加して正に四〇・三百萬マルクとなつたが、之に反して其他の銀行に對する債務の増加は二・三百萬マルクにして、全く前月と反對の現象を示してゐる。尙其他の債權者勘定に於ては本期も一〇・八百萬マルクで何等の變動も見られなかつた。更に手形裏書上の債務は一四・二百萬R.M.の著しい増加を示したが手形保證及保證債務は三・二百萬R.M.の増加を示し、證券定期取引上の債務は多少の減少を示した事は前に述べた通りである。

(四)

産業組合銀行の能働的業務の第一は組合員 對する 授信業務である。中産階級の産業組合銀行に對する要求が高められた結果は、明かに信用業務の著しい増加となつて現はれてゐる。それは手形項目(Wechselportefolio)

(Portfolio)を増加せしむるには至らなかつたが、恐らく此の現象は、再割引政策を強調する事に依つて相對的に其の増加が減ぜられた結果に外ならぬ。その代り當座預金勘定に於ける信用業務及貸付業務は著しい増加を示してゐる。能働的業務に於ては四九・二百萬R.M.の大増加を示してゐるが、此の増加は短期信用に負ふ所が大である。即ち當座預金貸越(Vorschüsse in laufender Rechnung)は前二ヶ月に於けると同様に四〇・七百萬R.M.の増加を示して第一位を占めてゐる。第二位は前月に反して證書貸付及保證貸付金(Vorschüsse gegen Schuldscheine, Bürgschaften usw.)が六・五百萬R.M.の増加を示して一・二百萬R.M.となつてゐる。手形信用は前月に於ては二・三百萬R.M.の増加を示したに反して本報告月に於ては僅かに〇・四百萬R.M.の非常に少額の増加を示したに止り、其の總額は二四九・三百萬R.M.に達した。之は明かに同期に於ける手形裏書上の債務の増加と一定の關係に有る事を示してゐる。動産擔保信用(Lombardkredit)に於ては

只僅か許りの變動を示したに過ぎなかつた。

産業組合銀行が與へた短期信用は一二四五八百萬 R.M. から一二九五萬 R.M. に増加したが、之に手形裏書上の債務を包含すれば一三八〇百萬 R.M. から一四四三・四百萬 R.M. に増加する事になる。更に又再割引に依る信用を加ふれば、更に大なる信用増加を示すであらう。かくの如く短期信用は大なる増加を示してゐるが、之を一産業組合銀行の平均にして見れば、信用業務に充當した金額は本年二月末の精算に於て百六萬 R.M. であつたに對して、四月末の概算に於ては百十六萬九千 R.M. の額に達し、正に戦前の百五萬六千 R.M. を超過してゐる。此の數字を比較する事に依つて、現在獨逸の信用組合が如何なる範圍に於て信用業務に従事してゐるかを知らる事が出来るであらう。

次に流動資産に就いて見るに、其の現象は餘り著しくないが、流動資産の減少傾向は確實に認められる。

即ち前二ヶ月に於て既に著しく九・六百萬 R.M. の減少を示したが、本期に於ても亦〇・五百萬 R.M. の僅かで

はあるが減少を示して一二七・八百萬 R.M. となつた。

本期の減少は非常に僅少であるが、其の内部關係に於ては夫々異つてゐる。即ち産業組合中央信用機關に對する債權は六・五百萬 R.M. の著しい減少を示して五八・八百萬 R.M. になつたが、之に反して現金及其他の銀行に對する債權は夫々増加して、現金は二六・九百萬 R.M. 其他の銀行に對する債權は四・二百萬 R.M. に達した。前二ヶ月に於ては之と全く反對の傾向を示して、現金及其他の銀行に對する債權は減少し、産業組合中央信用機關に對する債權が増加を示してゐた。

最後に尙抵當權信用が三・九百萬 R.M. だけ増して五四・二百萬 R.M. になつた事、手持有價證券の現在等が二百萬 R.M. の増加を示して三八・三百萬 R.M. になつた事、並に設備資産が新しく三・七百萬 R.M. 増加して四九・五百萬 R.M. に達した事を特筆せねばならぬ。

### (五)

以上に於て大體産業組合銀行の成績を概観し得たと

思ふから、次に此が眞の流動性 (Liquidity) 如何を考察して見たい。次に第四表に示す流動性は、既に吾々

の選抜信用組合に對して年鑑が採用してゐる形式に倣つて算定せられたものである。

第四表 産業組合銀行の流動性(單位千ライヒスマルク)

月 末	第一次流動資本	總流動資本	要求拂債務	外來資本總	第一次流動資本 %	總流動資本 %
一九二七年七月	101,493	300,697	251,664	107,266	73.6	35.4
一九二八年二月	97,033	300,080	259,426	97,215	73.1	32.7
一九二八年四月	96,996	304,852	266,102	107,533	71.0	35.3
一九二八年六月	105,662	305,852	268,899	124,766	74.9	41.1
一九二八年八月	118,662	304,699	260,071	130,872	75.5	43.0
一九二八年十月	130,085	305,703	263,842	137,333	76.2	44.9
一九二八年十二月	137,333	306,555	264,444	143,600	76.8	46.5
一九二九年二月	142,533	306,633	263,318	145,600	76.4	47.2
一九二九年四月	137,662	305,955	264,177	144,511	76.5	47.2

右の表に示された絶對數はその時々報告せられた信

對する債權、及銀行債權を意味し、總流動資本は第一

用組合の數字に依つたもので、大體精算であるが、只

次流動資本に手形及有價證券を加算したものである。

本年四月の數字は概算であるから、其の數字が他の數

更に要求拂債務とは要求拂預金及當座勘定預金、固

字に對して少ないのは當然である。次に第一次流動資

有の債務、銀行債務並に小切手を包含するものであ

本 (Liquide mittel i. Ordnung) とは現金、發券銀行に

る。

右の表に依つて見れば第一次流動資本の要求拂債務に對する割合は、一九二七年末二〇・五二%を示してゐたが、其後一時急激に減少して一四・七一%となつたが、漸次増加の傾向を示して一九二八年を終つた。

本年二月以來漸減の傾向を示して四月末に於ては二三・四一を示してゐる。之と同様の傾向は總流動資本の要求拂債務に對する割合に於ても認められる。而して本年四月末には其の割合は七六・〇七%を示してゐる。本年四月には第一次流動資本の外來資本に對する割合は九・五一%總流動資本の外來資本に對する割合は三〇・九〇%に上り、更に總資産に對する割合は第一次流動資本に於ては八・〇一%、總流動資本に於ては二六・〇四%になつてゐる。全體に於て見るに産業組合銀行の流動性は近來それが假令僅かな減少であつたとしても減少の傾向は認められる。四月に於ても同様に流動性の減少が現はれてゐる。それは慥かに現在の經濟狀態の著しい象徴である。然し乍ら此の流動性を之に相應する去年の數字に比較して見れば、本年に

於ては流動性の狀態は著しく改善せられた事を知り得るであらう。